【中学部　美術　実践の概要】

〇中学部２年　美術　（単一障がい学級）
〇本時の題目：「顔を描いた作品を鑑賞し、色使いや塗り方などの表現方法の違いに気づこう」
〇本時の目標：
・人の顔の作品を見て、色使いや塗り方、印象の違いに気づく。　（思・判・表）
・自分が作りたいお面の色のヒントとなる表現を見つけることができる。　（学・人）

授業者のねらいとしては、「鑑賞を行うことで、画家によって色使いや塗り方に違いがあり、その中で参考にしたい色使いや塗り方の絵を選ぶようにする」というものであった。授業では印象派の２枚の作品を鑑賞し、鑑賞シートに色使いや塗り方、感想を記入した。その後、現代美術の２枚の作品を鑑賞し、同様に鑑賞シートに記入した。最後に４枚の中で、次の作品づくりの参考にしたい絵を選び、授業を終えた。

【良かった点・工夫されていた点】

〇技法を教えることから始めるのではなく、生徒たち自身の描いてみたいという動機を大事にしていた。
〇自分と画家の色使いや塗り方などを比較することで、その違いに気づくことができていた。

【課題】

〇前時に簡単なお面づくりを行っていたことで、生徒も色使いや塗り方といった視点で作品を鑑賞することができた。しかし、「目の中にも色があるね」と言葉がけをするなど、本来は生徒自身が鑑賞を通して気がついてほしかったことを、教師が事前に伝えてしまうことがあった。
〇パワーポイントを用いて授業を進めていたが、板書として残らず、ワーキングメモリーに困難さがある生徒にとっては、見通しが持ちにくく、めあてや課題の振り返りが難しくなっていた。
〇１枚の絵に対して、生徒たちがワークシートに記入することに集中しすぎてしまい、やや作業的になり、生徒同士で作品の感想を対話する場面が設けられていなかった。
〇ある作品を見たときに、一人の生徒は「こわい」、もう一人の生徒は「かわいい」と発言していたが、授業を進めることに追われ、生徒一人一人の発言を受け止める機会を逸していた。

【助言】

〇教師の説明が長く、生徒たちの言語活動が不十分であった。生徒同士の対話、生徒と教師との対話、自己内対話といった対話が思考を深める場面となるので、鑑賞を通して、対話したくなるような授業展開にするとよい。
〇ワーキングメモリーに困難さのある生徒が振り返りやすくするために、補助黒板を用いて、めあてやポイント、まとめ等を随時提示する方法もある。
〇ワークシートを用いたことは思考を補助する上で有効だが、逆に作業的になりすぎていた。例えば、最初に絵の感想を聞き、そこから、ワークシートを用いて、どんな色使いなのか、どんな塗り方なのかといったことを書き込み、それを生かして話し合う方がより対話的になり、生徒たちが思考する場面が増える。
〇もう少し対話する場面があれば、見る人によって１つの作品の感想が違うことを知る機会になった。その違いこそが、生徒たちが思考したくなる鍵となり得るので、教師は子どもたちの発言をしっかり受け止め、授業に反映するとよい。
◎授業後、対象生徒に話を聞いた。
指導主事：「今日の授業で出てきた作品は、次のお面づくりの参考になったかな？」
生徒：「北村さんの作品みたいに、カラフルにしたいと思った。」
指導主事：「君の作ったお面も虹が描かれていてカラフルだったと思うけど？」
生徒：「北村さんのようにもっと色を使って、カラフルにしたいと思った。」
以上のように、教師のねらっていた次の作品づくりの参考にするということを言語化することができていた。深い学びの視点として、インプットしたことを自分なりに考えて、アウトプットすることが挙げられる。『振り返りの場面』を設定できていたら、この発言は授業内にできていたと考えられるので、時間配分や題材計画を見直すことが必要である。